

専門学科「情報科」における自己表現の苦手な学習者のための 自己表現活動モデルの提案

Proposal of self-expression activity model for learners who are not good at self-expression in the specialized department "Information Department"

高橋正憲[†]

Takahashi Masanori[†]

[†] 東京都立新宿山吹高等学校

[†] Tokyo Metropolitan Shinjyuku Yamabuki Hight School.

要旨

東京都立新宿山吹高等学校は、東京都で唯一の専門学科「情報科」を設置している。本校は、無学年制・単位制で多様な生徒が在籍している。生徒の中には、自己表現の苦手な学習者がおり、授業中に自分を積極的に表現することができない生徒がいる。そこで、情報技術を活用して、自己表現が苦手な学習者でも自己表現する場を設け、自己表現ができるように向かわせる授業を行った。複数の授業を実践した結果、共通の傾向と課題が発見された。その実践内容の結果と、結果を踏まえた今後の多様な学習者における自己表現活動モデルの提案について述べる。

1. はじめに

東京都立新宿山吹高等学校（以下「本校」という）は、単位制・無学年制の学校である。本校には、定時制と通信制があり、定時制は4部制の昼夜間定時制である。生徒は、進路や興味関心に合わせて自分で科目を選び、生徒自ら主体的に時間割を作成する。本校は、普通科のほかに、東京都で唯一の専門学科「情報科」が設置されている学校であり、専門科目「情報」の全ての科目の授業を実施し、システム系とコンテンツ系の両方を学習できるなど多岐にわたる専門的な学習ができる。

生徒は、高校に入学するまでに様々な経験をしており、現在も多種多様な環境にある。多様な生徒が在籍しているなかで、過去の経験からコミュニケーションをとるのが苦手であったり、自己表現が苦手であったりする生徒が多く学習している。

2. 研究の背景・目的

現代社会では、様々な場で発信する機会が増え、表現することが求められている。学校の教育現場でも、思考力・判断力・表現力を育むことが重要視され、授業中に自分を表現する機会が増えている。本校の授業は、50分授業を2時限連続で行う100分間授業を実施している。単位制・無学年制の特徴から、学年とクラスに関係なく授業に参加し、隣の席の人が知らない人であることも多い。そのような状況で、生徒は、授業中に自ら声を上げて発言することは難しく、自分の考えを表現することが苦手である。そこで、本研究では、情報技術を活用して、自己表現が苦手な学習者でも自己表現ができる場を設け、自己表現ができるようにすることを目的とする。また、自己表現ができる自己表現活動モデルを提案する。

3. 自己表現活動モデルの作成

本研究では、本校で実施している専門科目「情報の表現と管理」、「表現メディアの編集と表現α」、「情報メディア」の生徒を対象とし、表現力を育む授業を行った。生徒は、多種多様であり、お互いが知合いでない場合が多く、自己表現が苦手である生徒もいる。

3.1. 授業の実施内容

授業では、生徒が表現し、発信するために、情報技術として、Microsoft Teams を活用した。Microsoft Teams は、全教員と全生徒にアカウントが配布され、普段の授業やHRにおいて活用されている。本研

究では、Microsoft Teams の機能である共有機能とクラスノートブック、Whiteboard を利用した。

共有機能では、全生徒でファイルを共有し、各自で課題作品のキャプチャ画像を貼り付け、それに対して各生徒がコメントを書き込む作業を行った。クラスノートブックでは、与えられたテーマに対して何もないノートに各自で自由にアイデアを列挙し、それを各個人でKJ法を行い、文章にまとめる作業を行った。Whiteboard では、自分の考えを創出し、それを生徒同士で共有して新たな提案を出し、それに対して評価をする作業を行った (図1)。



図1 Whiteboard を活用した授業の一例

3.2. 授業実践の成果と課題

授業を実践した結果、次の2点の成果があった。一つは、匿名で投稿することで、発信することの抵抗感がなくなる。二つ目に、生徒同士でコメントし合えることで、他人からのフィードバックを得られる。課題としては、自由に入力させると表現方法が不明瞭になり、発信しづらいという点が挙げられる。また、一度の表現活動だけでは、表現力の育成にはつながらないという点が挙げられる。

3.3. 自己表現活動モデルの提案

授業実践の成果と課題を踏まえ、自己表現活動モデルを提案する。活動では、次の6つの活動を行う。

- ①チームビルディング：魚田らの研究[1]にあるように、学習者同士の意識を高める。
- ②指定の場所で表現する：学習者が匿名で表現する場所を強制的に確保し、発信しやすくする。
- ③他人の作品（表現活動）に対してコメントする：他人からのフィードバックを受けられる。
- ④他人からのフィードバックを見る：評価から自信を持つことができる。
- ⑤これまでの活動を繰り返す：②～④を繰り返すことで、表現することに抵抗感がなくなる。
- ⑥匿名でない状態で表現する：最終的には、匿名でなくても表現できるようになる。

授業実践から、最初は、匿名で表現活動を行うことで、これまで他人を意識して表現がしにくい学習者であっても、表現しやすくなる。また、表現の場を強制的に用意することで、学習者は、表現する場が明確になり、発信がしやすくなる。フィードバックでは、必ず「良い点」を書くように指示することで、他人からフィードバックを受けた学習者は自信を持ち、次の表現活動への抵抗感がなくなる。授業の一回の活動だけでは、表現への抵抗感の払拭は難しく、何度も繰り返すことで、表現活動に抵抗感がなくなり、発信がしやすくなり、徐々に匿名ではなくても表現が可能になる。

4. 今後の課題

本研究では、自己表現の苦手な生徒を対象にして授業実践し、学習者が表現活動ができるように向かわせる自己表現活動モデルを提案した。今後の課題としては、自己表現活動モデルを年間授業のなかで実践し、学習者の成長が視覚化できるようにする。また、表現活動を中心とした授業だけでなく、様々な授業における表現活動において活用できるようモデルを改善する。

参考文献

- [1] 魚田勝臣、渥美幸雄、植竹朋文、大曾根匡、関根純、永田奈央美、森本祥一、”グループワークによる情報リテラシ”、共立出版、2015
- [2] 魚田勝臣、渥美幸雄、植竹朋文、大曾根匡、関根純、永田奈央美、森本祥一、”グループワークによる情報リテラシ 教科書発刊の報告”、情報システム学会第11回全国大会・研究発表大会予稿集、情報システム学会